

## 第5回 国際政治・外交論文コンテスト

### 自由民主党 国際局長賞

#### 環境先進国日本の役割 ―洞爺湖サミットを控えて―

赤田 達也

「はじめに」

ドイツの社会学者ウルリヒ・ベックが、『危険社会』において、現代社会にはリスクが満ちていることを指摘している。ウルリヒ・ベックによれば、現代社会には、地球温暖化、原発問題、自然災害、狂牛病、遺伝子組み換え食品、情報流出など、本人がいくら注意しても避けようがないリスクが満ちているという。工業化、グローバル化、IT革命の進行などにより、リスクは世界規模で及ぼし合う危険性が高まっている。特に現在、地球環境問題は喫緊の課題となっている。持続可能な社会の実現に向けて、平成20年(2008年)7月7日から9日まで開催予定の北海道洞爺湖サミットの間を通じ日本はどのような主導的役割を果たしていけるのかという問題を論じたい。

#### 「1章 地球環境問題発生メカニズム」

共有地の悲劇とは、1968年に、ギャレット・ハーディンが提唱したモデルである。ハーディンは、共有地の悲劇を説明する際に、中世ヨーロッパの牧草地を事例として説明した。村落共同体内で入会権が設定された土地である入会地の牧草地では、牧草地が荒れないように、みな心がけていれば牧草は守られ、村人のすべてが牧草地の恩恵にあずかれるが、自分の羊だけにたふさぐ牧草を食べさせ、自分だけが利益を得ようとするものも出てくる。そうしたならば、他の羊飼いや争って自分の羊を連れて来て、牧草を食べさせるようになる。すると、牧草地全体が荒れ果て、誰にとっても、牧草地が使えないものになってしまう。

共有地の悲劇とは、つまり、集団のメンバー全員が、それぞれ利他の心で協力的な行動を取ればすべてのメンバーにとってメリットになることが分かっているのに、個々のメンバーが自分にとって都合のよい行動を取ると、結果として誰にとってもデメリットな状況をもたらされるというモデルである。例えば、切実な地球環境問題における各国の二酸化炭素の排出量を定めた京都議定書にアメリカ合衆国が参加しないことは、まさしく共有地の悲劇を引き起こしている。

また、近代合理主義の思想も環境破壊に結びついている。近代的思考方法の特質として第1に挙げられるのは、近代合理主義である。近代合理主義とは、物事を理性的にとらえて、合理的に判断、行動することを至上の価値とする態度のことである。地球環境の悪化の根底には、西洋の近代合理主義による科学万能主義や資本主義の発想がある。科学技術を根底とした資本主義経済システムにおいては、大量生産、大量消費、大量廃棄のシステムによって、どんどん消費を行って来た。資本主義とは、マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において明らかにしたように、初期には倫理があった。しかし、資本主義の進展

によって資本主義はあくなき利益追求の仕組みとなり、環境を犠牲にするまで暴走している。

## 「2章 環境問題改善に求められるパラダイムシフト」

1章で述べたような共有地の悲劇を回避するのは、お互いの信頼関係を築くことが重要である。例えば地域のゴミの分別を例にしてみれば、お互いに話をするとも少なく、顔見知り程度である町内会においては、自分がゴミの分別をしても、他の人は分別しなければ自分が分別をしようがないというパターンに陥り、全体としてのゴミの分別が進まないことが多い。その一方、町内会の結束が強くお互いの交流が深く、信頼関係が構築されている町内会では、町内会全体としてゴミの分別を話し合うため、他の人もゴミを分別するものと考えやすいため、自分もゴミを分別しようという気になりやすい。

このような地域のつながり、ネットワークのことを、政治学、経済学、社会学などの社会科学では、今日、ソーシャルキャピタル(社会関係資本)という。ソーシャルキャピタルとは、アメリカの政治学者のロバート・パットナムによれば、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」のことである。パットナムは、イタリアの調査から人々のつながりが強く、自発的な行動をする住民が多いコミュニティの方が、人のつながりが弱いコミュニティよりも、政策の効果が大きいことを発見した。

現代における地球規模の温暖化などの問題が、うまく解決へ至らず、このままでは地球が滅んでしまうという「不都合な真実」を回避するには、まずは国家レベルでのソーシャルキャピタルを高めることが欠かせないだろう。

地球環境の悪化の根底には、西洋の近代合理主義による科学万能主義の発想がある。その科学万能という自文化中心主義の打破が必要である。そこで参考となるのが、文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースの指摘である。レヴィ＝ストロースは、未開社会の研究を通じて、西欧文明のみが人間が到達すべき唯一のすぐれた文明であるという考えに疑問を投げかけた。そして文化の多様性と共存の可能性をさぐり、自分達の命を縮めるまでに環境を台無しにしている文明社会よりも、科学はないが自然と調和し平和に生活する未開社会の方が、むしろある意味では進んでおり、創造的な社会だと考えた。

こうした文化相対主義の発想から現代文明をとらえることは、環境問題の改善に有効だろう。地球環境問題の改善には、レヴィ＝ストロースが指摘したような文化相対主義の視点を持つことが必要だと考える。従来の科学万能というパラダイムでは、この問題は解決できないだろう。今まさに、近代合理主義を根底とした科学技術至上主義から、自然との調和を基調とした文明へのパラダイムシフトが求められると私は考える。

## 「3章 公共圏としてのサミット」

フランスのサロンは、18世紀のイギリスのコーヒーハウスと並んで多くの文化、芸術、政治経済の発信源として機能した。ドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバーマスは、『公共性の構造転換』の中で、イギリスのコーヒーハウス、フランスのサロンには3つの共通した特長があると指摘している。第1に、社会的地位の平等を全体とし、その差を度外視するような行動様式が要求

された。第2に、これらの場での討論は、それまで自明とされてきた通念や制度を問題にしていた。第3に、これらの場は、討論を通じて情報や文化を商品に転化させ、そのことで公衆を形成していく契機も内包していた。ハーバースは、そのような社会空間に着目し、フランクのサロンやイギリスのコーヒーハウスの情報センターや議論の場としての機能に着目し、それらの社会空間から様々な情報が発信され、ジャーナリズムの源流となったと指摘した。

つまりサミットとは、常識にとらわれずに、身分の上下に関係なく、自由にとことん話し合いを持てる社会空間である。先進国首脳会議、すなわちサミットは、単なる政治ショーであるという批判もあるが、人類の存続さえ危うくする喫緊の課題である環境問題を抱えた今、サミットはハーバースが指摘したようなかつてのコーヒーハウスやサロンのような自由に常識にとらわれずに議論できる場にするのが求められる。

環境社会学者の嘉田由紀子氏が滋賀県知事選挙に当選を果たした。自民公明民主推薦の相乗り候補を下しての無党派候補であった。嘉田候補の選挙戦略は、「もったいない」を合言葉に環境保護を掲げたものであった。このもったいないという言葉は、現在世界的な注目を集めている。ノーベル平和賞を受賞したケニアの環境副大臣で女性運動家のワンガリ・マータイ女史が、日本に来日した際に、日本語の「もったいない」に注目し、「MOTTAINAI」を世界の環境保護活動の合言葉にしようと宣言した。マータイ女史は、もったいないには、リデュース、リユース、リサイクル、リペアという環境改善の4つのキーワードが詰まっているという。

先進国の近代合理主義も確かに世界を豊かな方向に導いたが、環境破壊を推し進めてしまった面も否めない。日本は、MOTTAINAIという素晴らしい言葉を持つ環境先進国である。サミットにおいては、日本以外は欧米からの参加であり、西洋の合理主義を基調とした国々である。日本は、他のサミット参加国とは異なり、アジア的発想ができる。世界の環境問題を改善の方向に導くためのパラダイムシフトを促すことが、洞爺湖湖畔という場を公共圏にすることによってできるかもしれない。北海道洞爺湖サミットは、日本のリーダーシップによって、サミットの討論の場を、かつてのサロンやコーヒーハウスのようなものにするのが求められる。

## 「結論」

地球環境問題は、共有地の悲劇、近代合理主義によって引き起こされている。それらを解決し、持続可能な地球を手に入れるには、国家間のソーシャルキャピタルという信頼関係を築き、科学技術至上主義を改めるという文化相対主義の視点が不可欠である。そうしたパラダイム転換を行うには、洞爺湖サミットという場を、かつてのフランスのサロンや、イギリスのコーヒーハウスのように、自由に活発に常識にとらわれずに議論をできる場にするのが重要である。日本のリーダーシップによって、例えばMOTTAINAIといったようなリユース、リデュース、リサイクルといった循環型社会に欠かせないリサイクルの心が盛り込まれている言葉を学び、文化相対主義の視点を各国の首脳が身につけることが求められるだろう。例えば、反核の動きはパブウォッシュ会議によって始まった。世界の歴史は人間と人間の対話の積み重ねによって作られてきた。北海道洞爺湖サミットは、日本のリーダーシップによって、人類史の分岐点になるかもしれない。